

# 地域に学ぶ小学校教員養成課程の学生たち その2

——地蔵盆プロジェクトからの地域インターンシップ構想——

The curriculum to learn community issues in elementary school teacher training course:  
JIZOUBON PROJECT

中西 仁

NAKANISHI Hitoshi

## I はじめに

小学校教員にとって地域<sup>1)</sup>との関わりは避けて通れない。地域は児童の生活の場であるとともに、京都の番組小学校の歴史に見られるように、小学校教育を支えてきた主体である。戦前、戦後の生活綴方運動、東井義雄の『村を育てる学力』(1957)などに代表されるように、日本の小学校教員は今日まで地域と関わることで地道に実践を積み重ねてきた。現在の小学校教育課程においても、社会科、生活科、総合的な学習の時間では地域は学習の対象とされ、カリキュラム設計、教材研究、授業づくりにおいて小学校教員は地域と関わらざるをえない。

小学校教員は地域と関わらざるを得ないという状況を前提としたとき、現在の小学校教員養成課程には大きな問題が存在することに気づく。端的に言えば、学生の育ちの中で地域との関係がどんどん希薄となっていることである。過去の小学校教員達は育ちの中で、例えば地域の伝統行事で子どもとしての役割を与えられて参加したり、農業などの共同作業や地域清掃などの奉仕活動に「お手伝い」という立場で参加したり、といった形で密接に地域社会と関わってきた。ところが、少子高齢化、価値観の多様化などで地域が変容し、住民の個化が進む中で、このような体験の場は子ども達に提供されなくなってきた。現在の大学生達の多くは、このような現状の中で育ってきており、小学校教員養成課程の学生も例外ではない。つまり、地域社会の行事・生産活動などを経験していない学生達が小学校教員となり、勤務する小学校で地域と関わらなければならないという難問が発生する。地域と関わるという行為は、経験に

よってその質が左右されるものであろう。子どもの頃から様々な経験を積み重ねてきた者にとっては、地域は概念的なものではなく実質的なものであり、関わる際に必要となる視点やノウハウはある程度備わってはいるが、そのような経験のない者は、地域とどのように関わればよいのか、途方に暮れる場面が往々にしてあるだろう。

このような学生の現状に対して第二の問題が発生する。それは、小学校教員養成課程の正課の授業では、そのような問題点に対応する学びを十分に保障できないことである。サークル活動やボランティア活動の中で、活発に地域と関わり学びを深める学生たちがいる一方で、そういった活動に全く参加しない学生たちも存在する。活動に参加しない者の中には、決して地域でのさまざまな学びに興味関心が無いのではなく、そのような機会がたまたま無い、どのようにアプローチすればよいかわからない、といった者も少なからず存在している。

以上のような現状を受けて、筆者は例えばゼミのアウトリーチといった形で、正課とは言い切れないが完全に課外でもないという状況で、学生が地域で学べる場を提供してきた。<sup>2)</sup> さほど積極的でない学生達に対しては、「せっかくだからやってみよう」であったり、「先生が言うことだから仕方ない」といった状況をつくってやることも大切であると筆者は考える。

## II 地蔵盆を巡って

### 1 地蔵盆とは何か

地蔵盆とはもともと地蔵菩薩の縁日に行われる仏事を意味したが、今日では縁日前後に地域の地

蔵菩薩の祠等を中心に行われる民俗行事を指すことが多い。全国的に分布しているが、近畿地方や北陸地方で盛んに行われているのに対して、関東地方や東北地方ではほとんど見るできない。

京都市における地蔵盆はほとんどが自治会・町内会単位で行われており、2013年における実施状況は79%に及び、2014年6月に京都市によって「京都をつなぐ無形文化財」に選定された。<sup>3)</sup>しかし祇園祭や五山の送り火に比べて、全国的な知名度は大変低く、主に東海以東の学生に関して言えば、「京都に来るまで全く知らなかった」という反応が一般的である。

京都の地蔵盆とはどのような行事か、京都市文化市民局文化財保護課のHPより引用したい。

毎年8月中旬から下旬にかけて行われる伝統的な民俗行事である「地蔵盆」。地蔵信仰という宗教的な性格を持ちながらも、町内安全や子どもの健全育成を願う町内の行事として、時代とともに変化しながら受け継がれ、地域コミュニティの活性化に重要な役割を果たしてきた「地蔵盆」は、京都をはじめ近畿地方で盛んに行われている。

火災や飢饉、疫病の流行等が頻繁に起こり、自らの生活を守るために地域の助け合いが極めて重要であった近世において、お地蔵さんの祠（ほこら）やその周辺に見られる「町内安全」の文字が物語るように、地域の住民に安心と連帯感を与えてくれる存在としてお地蔵さんは祀（まつ）られてきた。

特に、江戸時代に入ると、人口が増加し、市街地の拡大とともに、町を単位とした住民自治が広がっていく中、お地蔵さんを祀る行事「地蔵祭（まつり）」「地蔵会（え）」（明治以降、盆行事の一つとして「地蔵盆」と呼ばれるようになった。）は、町内の主要行事の一つとなった。

しかし、明治初期における廃仏（はいぶつ）毀釈（きしゃく）の動きに伴い、路傍にあるお地蔵さんの撤去が進められた。市内でも多くのお地蔵さんが撤去されたが、明治の中期以降に

土中などから掘り起こされ、「地蔵盆」は復活することとなった。また、昭和の高度経済成長期には、新たに建設された新興住宅地やマンションにおいて、地域の行事として「地蔵盆」が積極的に取り入れられ、住民同士のつながりを深める役割を担った。

以降、「地蔵盆」は、子どもたちにとって夏休みの最後を飾る行事となり、お地蔵さんを飾り付け、お供えをして祀り、その前で子どもたちが集まり遊ぶというスタイルが一般的となった。また、子どもだけでなく、大人も積極的に参加することで、幅広い世代の交流の場となり、さらに、「地蔵盆」の開催に向け、町内の住民が力を合わせ、話し合いながら準備することは、町内の連携や協力体制を強めることとなった。<sup>4)</sup>

以上の引用から地蔵盆とは、伝統行事であること、時代によって形を変えてきたこと、コミュニティ意識が顕著である町内という単位で行われること、住民が主体となって行われること、現在は子どもが主役とされていること、町内の連携や協力関係を育てること、などの特徴を持つ行事であることがわかる。具体的な内容としては、地蔵の祠の清掃、供え物や灯籠・行灯の飾り付けといった準備や、数珠まわしなどの仏事、おやつ配り、ゲーム大会、花火大会、出し物、福引きなどの子ども・住民の交流を目的としたプログラムなどで構成されている複合的な行事であり、年度ごとのプログラムも担当者によって変えることが出来るという点で、他の祭礼などと比べて非常に可塑性な年中行事であるといえる。

## 2 京都における地蔵盆の現状

京都市の調査<sup>5)</sup>における実施率79%という数字だけを見れば、地蔵盆は盛んに行われているように思われるが、過去と比べてみた場合、地蔵盆は残念ながら衰退化していると思われる。自治会・町内会の長に対する京都市の調査内容は地蔵盆の変化や課題について問うていないのであるが、地蔵盆の日数に関する調査項目に依れば、「1日」との回答が77.9%を占めるが、もともと伝統的に

は8月23日24日の2日間の開催が一般的である。私事になるが筆者が生まれ育った西陣周縁地域では、1980年代までは8月14日～16日の3日間開催であったことを思い出す。衰退化・簡素化しているのである。

地藏盆が徐々に衰退している要因には地域の自治力、人と人とのつながりの希薄化、価値観の多様化などがまずあげられるが、最も大きな要因は少子高齢化であろう。例えば、京都市の調査に依れば、地藏盆の開催率が最も高い京都市の区は東山区であり、実に90%に上る。しかし2005年の国勢調査によれば、東山区の高齢化率は30.1%であり、政令指定都市の区で言えば全国最高レベルの高齢化率を示している。この数字からは、子どもの姿が珍しくなる中で、高齢者達が地藏盆を続けている姿が透けて見える。



写真資料1 子どものいない地藏盆

撮影時には高齢の女性が二人佇んでいた。飾り付けは彼女らがしたとのこと。

(2012年8月19日筆者撮影)

子どもを巡る環境の変化も地藏盆の形を変える大きな要因となっている。安全面に於ける危惧やコンピューターゲーム隆盛などを原因とする遊びの個化や外遊びの減少は、地域における子ども同士の交流の機会を失わせてきただろう。地藏盆では「同じ町内」の異年齢・異学年の子ども達が同

じ場所に集って一日を過ごしてきた。その場で行われる遊びは、子ども同士のコミュニケーションを通して成立する遊びなのである。こういった遊びの輪に入ることは、テレビゲームなどに代表される出来合いでかつ個化した遊びに慣れた子ども達にとっては、ある意味「面倒くさい」と考えられているのであろう。加えて、夏休みの短期化(京都市公立小学校では8月下旬に夏休みが終了するのが一般的)・習い事の隆盛等による外的要因による参加の困難化なども、地藏盆のあり方を変化させてきたと思われる。

### 3 地藏盆の持つ意味

戦争、高度経済成長、少子高齢化などといった時代や社会の様々な状況の中で地藏盆が途切れず行われてきた理由は何かであろうか。主として3つの理由があると考えられる。

一つ目は子どもを守る「お地藏さん」への信仰という宗教的・伝統文化的な側面である。現在のように医療技術や公衆衛生が進んでいないかつての状況では、子どもの死は当たり前のことであった。地藏盆の数珠まわしで行われた僧侶の読経の際には、町内で無くなった子どもの戒名が読み上げられた。地藏盆の度に大人達は亡くなったわが子の在りし日の姿を偲びながら、生きている子ども達の健やかな成長を祈ったのであろう。現在でも多くの町内で数珠まわしは地藏盆の一番大切な行事であると位置づけられている。地藏盆に遊びに来た子どもは、まず「お地藏さん」を拝むことを勧められる。このことは、地域の人々の「お地藏さん」への信仰心が底堅いことを実感させる。

二つ目は町内会・自治会の人と人とのつながりを確かにするために、不可欠の行事であると考えられているからであろう。行政サービスが現在よりももっと不十分であった時代、地域住民同士の相互扶助は不可欠であった。農村部に於いては田植えや稲刈りなどの生業に於いて、共同作業が必須であり、人と人とのつながりは必ずと深まる条件があったのに対し、都市部では何か仕掛けを作らないと、人と人とのつながりが希薄になりがち傾向があったと言えよう。地藏盆や祭礼、運動会などがその仕掛けになった。特に町内会単位で

行われる地蔵盆は、地域住民が自らプログラムを考えることができる行事であり、最も気楽に参加でき、最も交流が深まる行事でもあった。かつての地蔵盆には、昼間は子どものため、夜は大人のためという考え方で運営されている場合が多く、特に現在、ほとんど見られない若者層の積極的な参加が見られた。町内会・自治会の自治力・人と人とのつながりの低下が見られる現在、地蔵盆を活用し地域の自治力を高めようとする動きが見られるようになってきている。「まちづくり」という観点からも地蔵盆は地域にとって非常に貴重な財であるといえるだろう。<sup>6)</sup>

三つ目は子どもに対する教育的効果である。「地蔵盆プログラム」にとってこの側面は最も大切である。<sup>7)</sup> 子どもに対する教育的効果としてまずあげられるのが、宗教的な感性の涵養である。地蔵盆はもともと亡くなった子ども達の供養も含まれていた。高齢者達から地蔵についての仏教説話的な話を聞いたり、数珠まわしなどの宗教行事を体験したりすることは、昔から人々が大切にしてきた慈悲という思想や生きとし生けるものの命の大切さを理解する機会が、子ども達に対して開かれていることを意味する。また地蔵盆は、異年齢集団での遊び、外遊びなど現代の子ども達にとって貴重な遊びが出来る場となっている。異年齢集団での遊びは、年長者にとっては主体性や創意工夫、思いやりなどを育てるであろうし、年少者にとっては、自らのあこがれ・モデル、同年齢では獲得できない知識や考え方、遊びのルールなどを学ぶ機会となる。ここでの経験は、全ての年齢の子どもにとって、異質な者とのコミュニケーションを豊かなものとするだろう。<sup>8)</sup>

### Ⅲ 地蔵盆プログラムの実際

地蔵盆プログラムとは、小学校教員を目指す学生が、「地蔵盆で遊びのプログラムを企画・運営する」「地蔵盆で子ども達とあそぶ」というシンプルな中身のプロジェクトである。

#### 1 地蔵盆プログラムの目的

地蔵盆という伝統的な地域行事に関わることは、子ども社会専攻の学生達にとって、大きな意

義があると筆者は考える。現在、筆者が考えている地蔵盆プロジェクトの意義とは以下の3点である。

#### ①京都について深く学ぶ

本学で小学校教員養成課程が設置されている産業社会学部子ども社会専攻の学生は、全国各地から集まってくる。彼らは卒業後、全国各地の小学校教員になる場合が多いのだが、小学校の教育課程の中で「京都」はそれなりの位置を占める。すなわち、伝統文化・伝統産業や歴史学習のなかで「京都」が登場することは多いだろうし、修学旅行や校外学習の目的地として京都が選ばれることもあるだろう。そういった場合、京都の大学で学んだ教師が一定の役割を果たすことを求められることになる。多くの学生が寺社仏閣、祇園・嵐山などの名所、祇園祭に代表される年中行事を観光する。しかし、こういった観光だけでは表面的にしか京都を学ぶことはできないだろう。それに対して、伝統的な地域行事に主体的に参加する地蔵盆プロジェクトでの体験は、伝統行事の意義の理解や、地域住民の息づかいに触れるといった京都体験につながり、将来的に学生達が、京都に関連した教育内容に出会ったときに自信を持って取り組むことができるだろう。

#### ②地域とは何かを考える

小学校教員にとって地域と関わったり、地域が子どもにとってどのような意味を持つのか理解したりすることは非常に重要である。しかし、学生の実践的な学びの機会である教育実習は、学校現場という場に限定して行われており、実習生が地域の現状について学んだり、地域住民に触れたりすることはほとんど無い。また、実習生が見る子どもの姿は学校内に限られており、地域で子どもの姿に触れたり、子どもにとって地域とは何かを考えたりする機会はほとんど無い。はじめに述べたように、学生達の大半は地域と関わりの薄い生育歴を有している。地域で子ども達と遊ぶという地蔵盆プログラムは、学生達の経験の不足を補い、子どもにとって地域とは何かを考え、学ぶ場を提供する。

### ③異年齢集団との接し方を学ぶ

学生達は、教育実習ではある学年・学級に配当され、当該学級の児童と専ら関わる事が求められるため、異年齢集団の子どもと遊ぶ機会がない。しかし、各学年単級の小学校や小中一貫校に於いては、学年をこえた活動の重要性が叫ばれている。小学校教師にとって、異年齢集団の理解は欠かせないのである。地蔵盆に於いては、幼児から小学校高学年までの異年齢の子ども達が集まってくる。しかし現代の子ども達は異年齢集団での遊びの経験が少ないために、地蔵盆でもコンピューターゲームなどの一人遊びが見られるし、場合によっては「つまらないから帰る」という場面が見られる。これは子ども達が遊び方を知らないからであり、学生がリードして遊んでやると、子ども達は遊びだす。異年齢集団での遊びに慣れていない子ども達と、異年齢集団で遊ぶことは非常に難しい。遊びの難易度の設定、全員参加への配慮、子どもとのコミュニケーションなどへの工夫努力がなければ、楽しい地蔵盆は成立しない。

以上のような目的は地蔵盆プログラムの開始当初からのものではない。むしろ、毎年実践を重ねていくことにより、次第に明確化してきたものである。地蔵盆という行事は関われば関わるほど奥深く、可能性が広がる、今後もあらたな意義が見つかるものと思われる。

## 2 地蔵盆プログラムの実際

地蔵盆プログラムは筆者が意図して始めたものではなく、知人から知人の町内会の地蔵盆見学の誘いを受けたところから始まった。以下、これまでの流れについて述べていきたい。

### (1) 2010年

北区のI町内会の地蔵盆(8月22日)に、子ども社会専攻の学生3名(1回生2名、3回生1名)で参加した。もともとは、地蔵盆を見学するというのが目的であったが、「せっかくなので何か子ども達と関わりたい」という学生の希望を受けて、紙芝居をさせてもらうこととなった。紙芝居自体は短時間で終わってしまったが、その後、子どもと学生が遊ぶ時間を持った。例年の地蔵盆に

は若者層は参加しないので、子ども達は喜んで遊んだ。時間的には短く準備不足であったが、この経験が「学生が準備するプログラム+自由遊び」という地蔵盆プログラムの基本形につながった。しかし、このような取り組みを毎年行うとは思っておらず、2011年は実施しなかった。

### (2) 2012年

北区のS町内会の地蔵盆(8月18日)に、子ども社会専攻学生とメディア社会専攻学生5名(すべて3回生)で参加した。メディア社会専攻学生は筆者の専門演習所属である。S町内会には2010年参加学生Kさんの自宅があり、Kさんの父親が町内会役員であるところから依頼をうけた。2010年の反省を活かし、事前に2日間、企画・準備を行うなど事前準備に時間をかけた。学生が準備したプログラムは「クイズ」「宝探し」であったが、このプログラムは参加している子どもの中での年長者には好評であったが、幼児が楽しめたとは言えず、課題を残した。子どもとの自由遊びでは、鬼ごっこや水遊びなどで活発な子どもに対応する学生と、お絵かきなどで「おとなしい」子どもに対応する学生に分かれ、それぞれの得意を活かして子どもに対応することが出来た。



写真資料2 クイズ大会

学生は懸命に準備しているが、子どもは思い思いに遊んでいる。このような自由で緩い空気は、机のある学校の教室では見られない。

(2012年8月22日 筆者撮影)

### (3) 2013年

2012年と同じメンバーが同じ町内会の地蔵盆(8月17日)に参加した。昨年度と同じメンバー

が同じ町内会の地蔵盆に参加したので、準備段階では筆者はほとんど関わらず、学生の自主的な活動に任せた。「クイズ大会」では、特に幼児や低学年の子ども達が楽しく参加できなかったという反省を活かして、この年は年齢を超えて楽しめる身体を使った遊びプログラムを用意した。結果、ほとんどの子どもが楽しく参加でき、異年齢集団全員が楽しめる遊びを計画・実施するという目的を達成することが出来た。

同じ学生が参加することで、子ども達は昨年よりもリラックスして学生と接することができたし、学生は一年ぶりに会う子ども達の姿に、子どもの成長を感じる事が出来たようである。



写真資料3 新聞紙大陸ゲーム

異年齢の子どもチーム全員が新聞紙の上に乗し、学生とじゃんけん。負ければ広げた新聞紙を折りたたむ。新聞から降りたら負け。年上の子どもが何とか粘ろうと、幼児をだっこしている。

(2013年8月17日 筆者撮影)

#### (4) 2014年

S町内会から「本年度も是非」という依頼を受けた。昨年度参加した学生達は卒業してしまったので、当該年度の筆者の専門演習の3回生7名が、S町内会の地蔵盆（8月23日）に参加した。

学生達にとっては初めての地蔵盆プロジェクト参加となったが、もともと筆者のゼミは全体テーマとして「子どもと地域との関わり」を掲げているので、学生達は地蔵盆を学びの場として捉えることが出来ていた。学生達はゼミ活動やゼミ後のサブゼミ活動で、地蔵盆プロジェクトの計画を練った。また筆者もこれまでは当日のみの参加であったが、5月24日に行われたS町内会の地蔵

盆に向けての「寄り合い」に参加し、地蔵盆プロジェクトの目的を町内会の世話役に伝えたり、世話役から学生に対する要望を伺ったりすることが出来た。

当日はまず数珠まわし参加。その後、例年通り、学生が企画・準備したプログラムと自由遊びを行った。昨年と学生達が入り替わっているのに、子ども達ははじめなかなか学生達となじむことが出来ず、閉じられた小集団で遊んだり、中にはコンピューターゲームをする子どもも現れた。そこで学生達は「子どもをゲームから引剥がそう」という声を上げて、「新聞紙タワー」というゲームを始めた。子ども達と学生が二つに分かれ、新聞紙とガムテープを使ってどこまで高い工作物をつくるか出来るかを競うゲームである。異年齢の子ども達がそれなりに楽しめるゲームであったが、高さや巧緻性が要求されるので、最後は学生の関与が大きくなった。一見、盛り上がったように見えても、全ての子どもが同じように楽しんだわけではなかったことが課題である。しかしこういった課題は、現場に出てはじめてわかるものである。



写真資料4 数珠まわし

「命の大切さ」「自分の命を支えてくれているあらゆるものへの感謝」という近所のお寺の住職さんの、子供に向けた法話を聞き、子どもと一緒に数珠を回すという貴重な体験が出来た。高齢者、親世代、若者、子どもという多世代の数珠まわしの姿は、かつての地蔵盆を彷彿とさせる。

(2014年8月23日 筆者撮影)

#### (5) 2015年

2015年もゼミで取り組む予定であったが、教員採用試験や就職活動により、地蔵盆の時期には

多くの学生が参加できないことが明らかとなった。他学年の学生に呼びかけたが、反応ははかばかしくなかった。またS町内会も役員さんが入れ替わり、声がかからなかった。そのときS町内会の取り組みを知った隣のM町内会から地蔵盆に参加してくれないかという声がかかり、了解した。(S町内会からもその後声がかかったが、残念なことにお断りするより仕方なかった。)

M町内会の地蔵盆(8月22日)には、筆者の卒業研究のクラスの4回生5名が参加した。5名中、昨年度からの連続参加の学生は3名である。M町内会はS町内会より面積がかなり広く、子どもの数も多かった。S町内会の地蔵盆が子ども達の家の近くで、少人数でアットホームに行われるのに対して、M町内会の地蔵盆はおやつ配りなどの際に、親が子どもを連れてきてすぐに家に帰るという参加形態であった。学生達は集団で遊ぶゲームを用意したが、遊び集団が成立しなかった。またプラ版づくりで子ども達と接したが、学生が手を貸す場面が多くあり、子どもの自主性や主体性を形成できるような場面は少なかった。学生達には町内会による地蔵盆の違いが実感できたと思う。



写真資料5 プラ版づくり

子どもが学生と共同でつくる場面よりも、子ども(特に幼児)が学生に作ってもらおうという場面が多く見られた。(2015年8月22日 筆者撮影)

### 3 課題

5回(年)にわたって実施してきた地蔵盆プロジェクトであるが、実施する中でいくつかの課題が見えてきた。主な課題について振り返りたい。

#### (1) 「人」・「関わる地域」の継続性の問題

2012年と2013年は同じ学生が同じ町内会の地蔵盆に連続して参加することができた。2013年には学生達は前年の反省を活かして地蔵盆プロジェクトに取り組むことが出来た。また同じS町内会であるので、学生達はS町内会の地蔵盆の雰囲気を知っており、リラックスした気持ちで地蔵盆に参加することが出来たと思う。地蔵盆は、田岡(2011)が指摘するように、「自由性・開放性・解放性」「多世代間の相互交流」「護られているという安心感」という特性を持つ行事である。そのような行事にはある程度気楽な気持ちで参加しないと、場の雰囲気を壊すことになるだろう。同時に地蔵盆に参加する子ども達のメンバーも、さほど替わらないことから、子ども達は学生を受容しており、深い交流が出来たと感じる。



写真資料6 ふたり遊び

内遊びが好きな女の子が学生とお絵かき。この種の遊びが成立するのは、ある程度コミュニケーションが深まってからである。このような「ゆったりした時間」が味わえることも地蔵盆の魅力であろう。

(2012年8月22日 筆者撮影)

2013年から2014年にかけては地蔵盆プロジェクトを担う学生のメンバーが、2014年から2015年にかけては、参加する町内会が変わってしまった。経験の伝達や行事における臨機応変な対応を考えたとき、プロジェクトを担う学生集団はプロジェクトの経験者を含むいろいろな回生で構成され、経験者(上回生)が未経験者(下回生)に自

分の経験を伝えるような形が望ましい。これまではゼミ単位で行ってきたが、年度ごとの筆者のゼミの担当状況に左右され、関わる学生の継続性を担保できなかった。例えば、学生の回生を問わず広く募る「企画もの」での実施や、毎年開講の正課の授業に取り込んでの実施なども考える必要がある。関わる町内会についても、プロジェクトの内容や学生の学びの深化という観点から、出来るだけ同じ町内会が望ましいと筆者は考える。しかし、この点については当該町内会の事情、特に当該年度の役員さんの地蔵盆運営の考えに左右されることが多く、悩ましい限りである。

## （2）参加・参画のあり方

行事に参加する学生の意図は様々であるが、ほとんどの学生が何らかの学びを期待して参加している。とはいえ、これまで学生に対しては前述の地蔵盆プロジェクトの3つの目的を示したに過ぎなかったし、学生がどのように学んだのか個別に検証することもなかったので、プロジェクトが予定調和的かつ「やりっぱなし」という状況であった。この点を回避するには、学生に事前に自らの学びの目標を立てさせ、後で検証するのが定番であろう。しかし地蔵盆という楽しい行事には、学生がわくわくとした気分で参加することが何よりも大切であり、それがプロジェクト成功の大きな鍵とも考えているので、あまり「学び」を前面に出してしまうことは避けたい。どうすれば学びを半ば意識し、半ば忘れて活動させられるのか。これはプロジェクト系の学びに共通する大きな課題であろう。

学生の参画という視点から課題と考えられるのは、学生達をどれだけ深く行事に関わらせることができるかである。地蔵盆を行うためには、事前に町内会では様々な準備が必要である。まずS町内会では、5月に地蔵盆に関する町内会の寄り合いがあり、昨年度の反省や役員の意向を踏まえて、当該年度の地蔵盆のあり方が話し合われていた。また、地蔵盆の前日や当日の朝には地域住民の人たちがボランティアに地蔵盆の準備をし、地蔵盆終了後には後片付けをされていた。こういった寄り合いや共同作業の場は、学生が住民の自治

活動を学ぶには格好の場となると感じたが、プロジェクトでは地蔵盆の行事本番のみの参加となってしまうていた。地域住民の自治を学ぶためだけでなく、学生の主体性を育てるためにも、町内会役員さんと連絡調整しながら、「つくる段階」から地道な共同作業まで行事に参加させることが必要であると感じた。

## おわりに 一地域インターシップの構想

学校インターンシップやボランティアでは、小学校教員に必要とされる「子どもにとっての地域とは何か」という問いを基本に据えながら、地域や地域住民と関わる機会はほとんど無い。教職課程に地域・地域住民に学ぶ学びを補完するためには、「地域インターンシップ」という新たな学び方・学習活動が必要ではないか。

地域・地域住民に学ぶ「地域インターンシップ」は教職の学びにどのような可能性をもたらすのであろうか。

本学小学校教員養成課程の多くの学生達は、学校インターンシップやボランティアに積極的に取り組んでいるが、学校インターンシップやボランティアにおいては、学校外での活動や地域との関わりを経験できる機会はほとんど無い。学校とは多くの子どもにとって、多かれ少なかれ緊張を強いられる場であり、学校内での子どもの姿はあくまでも子どもの一面にしか過ぎない。それに対して、地蔵盆に遊びに来る子どもはリラックスしている。他者とのコミュニケーションも、学校におけるそれとは例えば円滑さや深さという面で、質的に異なっているだろう。学生達が、学校インターンシップやボランティアでの経験から、子ども達のコミュニケーションや思考を「こんなもんだらう」とわかったつもりになっていても、地蔵盆という場でリラックスした子ども達とコミュニケーションした結果、これまで学校という枠の中だけで形成されてきた自らの子ども観は修正を余儀なくされるだろう。

子ども達の感情は、日常よりもハレの場でより開放されることを考えれば、学生達が豊かな子ども観を育てる場として、地蔵盆は相応しい。

学生達が地域の人たちと接するなかで、学生達

に地域の人たちの自治意識や人と人とのつながりを肌で感じることや、子どもにとって地域とはいかなる教育的資産となりうるのかを学ぶ機会を保障することも地域インターンシップの意図するところである。例えば地蔵盆において大人が子どもに対して誰彼なしに声をかけたり、世話したり、叱ったりという場面をよく見かける。これは大人達が「ここにいる子ども達全員自分たちの町内の子どもである」という捉え方を共有し、子どもは地域が共に育てるものと意識していることのあらわれであるといえよう。学校を出た生活の場である地域で、子ども達は学校教育とはまた違った育ちに対する支援を受けているし、地蔵盆を護り続けているような自治意識の強い地域であればそれが豊かなものとなっている。こういった事実を、教員を目指す学生が知ることは、将来、様々な教育活動の中で子どもに地域の存在意義を正確に伝えたり、地域の人たちの学校や子どもに対する期待や思いを正しく理解したりすることにつながるだろう。

現在、文部科学省は、「学校と保護者や地域の皆さんがともに知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させることで、一緒に協働しながら子どもたちの豊かな成長を支え「地域とともにある学校づくり」を進める仕組み」<sup>9)</sup>であるコミュニティ・スクール制度を推進している。この制度の是非については様々な議論があるが、例えば京都市などでは全ての小学校が「コミュニティ・スクール」に当てはまる。コミュニティ・スクールの成否は学校と地域の協力関係、地域の自治意識、地域の教育的環境・資産に多くかかっていると言えるだろう。地域の人たちと協力して地域の教育環境の向上や教育的資産の保護・育成に努めることは、今後、教員の仕事の一部となるだろう。すなわち教員にも「まちづくり」の視点が必要になってくるのである。「まちづくり」の視点を獲得するには、地域の自治的な活動に参加することが一番であろう。その際には、ただ地域の人たちの指示に従うだけの活動や態度では、「まちづくり」の視点は獲得できない。地域の人たちの姿を学ぶこと、地域の課題について学ぶこと、課題改善に向けて自らの創意工夫を試すこと、といったことが必要に

なってくる。学生たちがプログラムや遊びを企画・運営することによって地蔵盆に参画する地蔵盆プロジェクトは、学生達にとって「まちづくり」の視点を獲得する格好の学びとなるだろう。地蔵盆プロジェクトを経験した本学小学校教員養成課程の学生達が、全国各地で小学校教員となり、勤務する地域において、地蔵盆プロジェクトで培った「まちづくり」の視点を応用し、地域行事を盛り上げていく姿を想像するのは楽しい。

全国各地には地蔵盆と似た行事が数多く存在する。<sup>10)</sup> そのような行事でもプロジェクトや学びの場を設定することは可能である。「(京都の)地域の独自性を学ぶ」「子どもにとって地域の持つ意味を学ぶ」「伝統行事の持つ意味を学ぶ」「子ども、子ども集団について学ぶ」「企画力・主体性を磨く」地蔵盆プロジェクトを、京都の大学のローカルプロジェクトに止めることなく、小学校教員養成課程における「地域インターンシップ」のよりよいモデルとするため、今後も実践研究を重ねていきたい。

#### 【註】

- 1) 本稿では地域という言葉を、児童の実質的な生活の場である自治会・町内から小学校の校区域を想定している。地蔵盆が行われる京都市では、校区域は伝統的に「元学区」「学区」と呼ばれる。「元学区」とは明治初期にスタートした番組小学校等の校区域という意味である。
- 2) 例えば、中西仁「地域に学ぶ小学校教員養成課程の学生達-京北子どもプロジェクト-」『立命館教職教育研究』創刊号 2014
- 3) 京都をつなぐ無形文化財普及啓発実行委員会 (2015)
- 4) 京都市文化市民局文化財保護課 (2015)
- 5) 以下、京都市の調査と表現している場合、全て京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 (2014) に依る。
- 6) 前田、森重 (2012) によれば、地蔵盆がない町内のために元学区単位で地蔵盆が行われている例や、マンション住民と元々の地域住民が協働して地蔵盆を開催し、活気のある地蔵盆が復活した例などが挙げられている。
- 7) 田岡 (2011) は、地蔵盆がもつ「自由性・開放性・解放性」「多世代間の相互交流」「護られているという安心感」が子どもの育ちに形成的意味を与えるとする。
- 8) 中谷、小伊藤 (2012)。この研究は、石川県加賀市の調査をフィールドにしているが、行事の内容自体は京都市域の地蔵盆と大きくは変わらない。

- 9) 文部科学省（2011）
- 10) 授業で地蔵盆の話をしたところ、山梨県出身の子ども社会専攻学生が、出身地には地蔵盆は無いが、似たような子ども中心の伝統行事として「天神講」があると教えてくれた。

**参考文献・資料・HP**

岩佐礼子『地域力の再発見－内発的發展論からの教育再考』藤原書店 2015

岡崎友典、夏秋英房『地域社会の教育的再編－地域教育社会学－』放送大学教育振興会 2012

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課「地蔵盆に関するアンケート調査」2014

[http://kyo-tsunagu.net/wp-content/uploads/2014/05/jizo\\_bon.pdf](http://kyo-tsunagu.net/wp-content/uploads/2014/05/jizo_bon.pdf)

（最終閲覧 2015/09/30）

京都市文化市民局文化財保護課「京都をつなぐ無形文化財京の地蔵盆」2015

<http://kyo-tsunagu.net/jizo/jizo-sentei/>

（最終閲覧 2015/09/30）

京都をつなぐ無形文化財普及啓発実行委員会『京の地蔵盆（ハンドブック）』2015

渋谷忠男『学校は地域に何ができるか』農山漁村文化協会 1988

田岡由美子「地蔵盆における子どもの育ち」『関西教育学会年報』35号 2011

中谷崇、小伊藤亜希子「地蔵盆にみる異年齢集団による子どもの発達環境－加賀市の南郷地区・大聖寺地区を事例として－」『大阪市立大学生生活科学研究誌』Vol.11 2012

前田昌弘（研究代表者）、森重幸子（共同研究者）、研究協力部署京都市文化市民局地域自治推進室地域づくり推進担当「地蔵盆の運営実態と地域のレジリエンス向上に果たす役割に関する研究」2012

[http://www.consortium.or.jp/wp-content/uploads/kenkyuseikahoukokusho\\_2012\\_maeda.pdf#search](http://www.consortium.or.jp/wp-content/uploads/kenkyuseikahoukokusho_2012_maeda.pdf#search)

（最終閲覧 2015/09/30）

文部科学省「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）」2011

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/community/](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/)

（最終閲覧 2015/9/30）